

おい図書館

No.222

発行
代表
青木 和子
松本市牧の原 1-10-4
TEL 0477-311-0886
4/16

あらためて考えてみる

「図書館ってなんだろう？」



マツコ 小川タチ

子育てにまつわる様々な団体に
コネクトさせて頂いている「マツ
コ」です。

教育委員会や市議会の傍聴
でもご一緒させて頂いている「お
い図書館」の勉強会に参加しま
した。

今回は「図書館が日本を救う」
公共図書館の可能性」というテー
マで、講師の常世田良先生（元立
命館大学教授）から図書館にまつ
わるいろいろなお話を伺いました。
たくさんのお話の中から、特に印

象に残ったお話を紹介します。

①図書館の本質「情報提供とネ
ットワーク」

図書館には「本を貸すところ」
「幼児と母親、高齢者の居場所」
「受験生の学習室」そして「社会
の片隅にある」いやしの空間とい
うイメージがあるが、本を貸
すのは「手段」であって、本来の
役割は「情報提供」。何かやりに
い事があつた時に調べたり、図書
館は自己実現の場である。特に30
代、40代、50代の働き盛りの世代
に村する情報提供が、現状では足
りない。

②図書館員の仕事とは「人と人
が会って、課題が解決できるよ

うに情報でサポートする」

図書館員さんといえば、カウンタ
ーでピツと貸出し業務をしている
印象が強いが、本来は「情報の専
門家」である。例えば、一般的に
何か調べたい時には「Google」類似
のキーワードで検索していること
が多く、それだとワンパターンな
情報しか得られない。そこに情報
を引張り出す技術のある図書館
員がいれば、もっとたくさん的情
報を得ることが出来る。

本は自動貸し出し機で利用者自
身が行い、本の整理はロボットを
導入して、必要な人数の司書を採
用すれば、本来の市民の情報収集
の専門的なサポートが出来る。さ
らに市民が自由に交流すること
で様々な活動が生まれる空間を提
供する事も、図書館の大事な役
割である。

③図書館のホスピタリティ「情
報弱者には、何が必要か聞き出し

て提供する」

マニユアル的なサービスでは成り立たない。常に最先端のメディアを取り入れて、必要なところに出来る限り情報を提供していく。さらに待っているだけではなく、移動図書館や子ども向けの司書のおはなし会など、どんどん出向していくことも必要。

④ 常世田先生オススメの図書館

- ・ゆいの森あらかわ(東京都荒川区)
- ・塩尻市民交流センター「えんぱーく」(長野県塩尻市)
- ・浦安市立図書館(千葉県浦安市)
- ・別府市立図書館(大分県別府市)

はい……

現在、松戸市では公共施設再編の真っ最中で、まずは老旧化した市庁舎をどうするかという問題が話題になっています。昨年、図書館と中高生の居場所と市役所支所がひとつになった複合施設「ひがまテラス」がオープンしましたが、

現在の図書館本館も建設から50年近く経ち、建て替えが必要な時を迎えています。常世田先生から本来の図書館やそこで働く司書さんの役割のお話を聞いたあと、では松戸市立図書館がどんな状況なのかを調べてみたら、H.28年3月付で「松戸市図書館整備計画審議会」(会長は常世田先生)より「松戸市立図書館施設整備に関する提言」として提出されていて、もうこのまま作っても良いのではないかと思うくらいに図書館への思いが詰まっています。やはり市民としては、今の時代に合った新しいきれいな図書館が欲しい！

今後、再編計画の中で図書館がどう位置付けられていくか、注目していきたいと思います。

今回、常世田先生のお話を聞いて、これまで「図書館」本を借りたり、読んでみるところと違いイメージが違ったのですが、「情

報提供の場」という視点は新たな気づきでした。今後は、調べてみたい事があつたら「情報収集」するのための選取肢の一つとして図書館を積極的に活用していくことで、市民の側からのニーズも伝えていきたいと思いました。

さあ、お近くの「図書館」へ行ってみませんか？(心)



先日の常世田先生の講演会は、ためになりました。

私は日本の図書館しか知らないのですが、海外の図書館がもっと人の人生に積極的に関与してくれものとは想定外でした。人が集まれる所であること、いろいろな情報を専門家(司書)が提供してくれるサービスが期待できるなんて、ワクワクしますよね。あまりにも教えられていた図書館像にしばらく、いいなあ、と思いました。でも、

仕方ないですよ。それしか知らなかったのですから。

そう、いう意味で、新しい事を教えて頂けてイメージが膨らみました。講演会へのお誘い、ありがとうございます。

投稿

「ぴかま」フテラスオープンに寄せて



イギリス在住 山本光子

松戸市立図書館東松戸地域館

素晴らしいものができましたね。

設置された自動借出し機は、私も英国で使っています。英国のもの

は、借出し・返却機です。

英国では、借出したものの返却

が遅れると延滞料金がかかるので、

「返却」の機能も付いたものになって

います。その上、クレジットカー

ドを使つての延滞料金の支払いも

機械でできるようになっています。

本を乗せるところに背が届かない

小さい子供も、引率者(祖父母の場合もあります。)に抱え上げられて利用しています。

地域館のパンフレットや「おい

い図書館」が市へ提出した「要望

書」に目を通したりにしています。

立派な中央図書館ができて、そうす

ね。あとは「蔵書数」と「館員の

質」の問題かと思っています。

でも、何年後になるのかなあ！

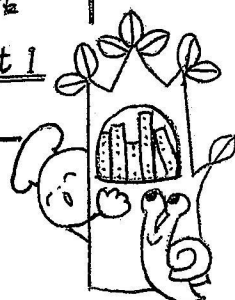
いずれにしろ、期待が大きくなっ

てきます。

投稿

図書館の話

Part 1



神博子

メンポタミア文明時代、楔形文

字の粘土板文書を集めた図書館に

始まって、それぞれの時代と文明

を表す図書館があった。現代には、

先進的な「ニューヨーク公共図書

館」がある。

常世田先生の講義で知る「図書

館のあるべき姿」と私の図書館体

験はあまりに落差があるけれど、

「おいい図書館」足例会で学んだ

「戦争から本や図書館を守った人

びと」の刺激を受けて、最近読ん

だ本の報告をしたいと思う。

たまには、本に関する情報交換

をしませんか。

①「希望の図書館」：リサ・クラ

イン・ランサム作 ポプラ社刊

実在の「シカゴ公共図書館」に

出会った黒人少年の物語で、暖か

いものが心に残った。

「私たちが見せ本を読むのか、

愛するのか、その理由についての

おおよすべだが、この中に書か

れています。辻村深月：本の帯

にあったこの言葉に付け加えるも

のは無いかもしれない。

この本が翻訳出版されたのは2019

年。私はクレヨンハウスのブッククラブの紹介で知った。

②「アウシュビッツの図書係」：アントニオ・G・イトゥルベ著 2016年集英社刊

「面白いから読んでみて」と友人から渡されて読んだ。当時話題の本だった。

アウシュビッツの強制収容所での実話をもとにスペイン人ジャーナリストが書いた小説。14歳の少女デイタはナチスの監視の目を盗んで、歴史、文学、地図、数学など偶然手に入った8冊を守りぬく。作者は、絶滅収容所の中で本を読む意味を「本を読んでいるときは、心が自由である」という。デイタは、アウシュビッツを生き抜いたチエゴ人のデイタ・クラウスがモデルだという。

③「シリアの秘密図書館」：ミネル・フィース・ミヌーイ著 2018年東京創元社刊

「アラブの春」の最終局面で、シリア民主化運動はアサド政権の激しい弾圧を受けていた。自国民への爆弾投下をいとわない政権！若者たちは互殺の中から本を握り出し、首都ダマスカス近郊のダラヤに地下の図書館をつくった。彼らは理工系の学生で、特に本が好きだったわけではない。

蔵書は1ヶ月ほどで1万5千冊にもなった。本を分類し、番号を付け、元の持ち主の名前を記載して、図書館利用規約を設けて開館する。彼らは活動の合間にそこで本を読み、歴史を学び、古今東西の文化を知り、民主主義を学んでいた。

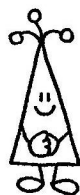
2015年にそれを知ったフランスのジャーナリストが、途切れがちなインターネットをつないで取材して書き上げたドキュメンタリーだ。

2016年には、ダラヤに居られなくなった若者たちはイドリブに移動して活動を再開するが、宗教勢力

の支配下に置かれ、仲間たちは国外に散って行く。とても痛ましい。が、彼らが命を賭して本を集め、本を通して学び、ディスカッションしたことは、彼ら自身を豊かにしただけではない。シリアの未来を信じられるような気がする。

本の出版と合わせて、ダラヤ時代と解散後までを追ったTVドキュメンタリーとが放映され、深い印象を残した。

※残念ながら紙幅が足りなくなりました。Part2は次号に掲載させて頂きます。どうぞお楽しみに。



松戸市立図書館では

2022年3月で村上陽子前館長は移動され、4月からは大竹英貴新館長が就任されました。

これからのご活躍を大いに期待しております。